

要塞、市壁、「石の商館」

——インド・コロマンデル海岸の港町：一六〇六—一七〇七年——

和田 郁子

【要約】 そもそもヨーロッパ諸勢力が進出するまで、コロマンデル海岸の港町には要塞も市壁も存在しなかった。しかし、一七世紀初頭 オランダ東インド会社がブリカットに要塞を築いたことにより、本格的な要塞を擁する港町が登場する。そして約一〇〇年後の一八世紀初頭には、イギリス東インド会社が租借権を得た一六三九年当時は一漁村に過ぎなかったマドラスが、要塞と市壁を併せ持つ港町として台頭し始めるのである。本稿は、要塞や市壁という新しい建造物が同海岸の港町に造られようとする過程に注目する。特に、一七世紀後半、防備強化の必要に迫られ、市壁や石造りの商館の建設を望みながらも、既存の港町の秩序や現地権力者とのしがらみに阻まれ、思うに任せなかつたオランダの事例を分析することによって、同時期にいち早く堅固な防備施設の獲得に成功し、台頭への足がかりを掴んだマドラスの特徴を浮き彫りにしようとするものである。

史林 九五卷一号 二〇二二年一月

はじめに

一五世紀末のポルトガル船団のインド洋進出が、それまでのこの海域における「平和な海洋航海システムを突如として終わらせた」^①とする見方は現在広く受け容れられている。確かにポルトガルが導入した航海許可証（cartas）のシステムが、交易路上の要衝に築かれた要塞と武装した船団の力を前提としていたことは周知のことである。約一世紀遅れてアジ

ア貿易に参入したオランダやイギリスの東インド会社にとっても、船に火砲などを装備し、強固な防備をもつ拠点を確保することは、当初よりその活動の重要な一部と捉えられていた。そのことは、オランダ東インド会社 (*Verenigde Oostindische Compagnie*: VOC) 設立時の特許状において、喜望峰以東での貿易に関する独占権に加えて、戦闘行為や要塞の建設が認められていたことから明らかである。^②

実際、ポルトガルやオランダ、イギリス、フランス等はインド洋沿岸各地にいくつもの要塞を築いたが、今も残るそれらの遺構の中には、分厚い外壁、銃眼、堡壘などを備えた堅固な造りのものも少なくない。しかしながら、それらの要塞を築いた当時のポルトガル人や各国の東インド会社が、必ずしもその周辺を広く領土支配していたわけではなかったという点については注意が必要である。とくにインドの場合は、要塞の建設地やその周辺地域を政治的に支配する王や領主もいれば、その港町を拠点とする海上および陸上の交易活動などに利害をもつ商人たちもいた。言うまでもなくヨーロッパ諸国間の競争もあった。また、要塞のような建造物を建てるには、時間も労力も資材も必要であることを考えれば、積極的にせよ消極的にせよ、何らかの形で現地の人々の関与が欠かせなかつたはずである。したがって、要塞が建設された経緯、それが可能になった背景には、複数の勢力の間の力関係や駆け引き、政治・社会・経済の情勢変化などの様々な要因が働いていたと考えられる。

このような視点から本稿では、いずれも一七世紀から一八世紀初頭にかけて建てられた要塞の遺構を持つ、インド東南部コロマンデル海岸の三つの港町——プリカット、マドラス、およびマスリパトナム——に注目する。^③ 中部のプリカット *Pulicat* と北部のマスリパトナム *Masulipatnam* が一七世紀初頭までには既に多くの商人が活動する港町となっていたのに対して、マドラス *Madras* は一八世紀以降コロマンデル全域を代表する港町となる場所である。これらの港町については、東インド会社の貿易活動やヨーロッパ諸国のアジア進出について取り上げる際にもしばしば言及され、インド洋交易や様々な商人集団の活動に関する研究の中でも注目されている。^④ また、個々の港町に注目した研究も進められてきた。^⑤

特にイギリスによる植民地統治期に重要な役割を果たし、今日においてもインド共和国有数の大都市であるマドラス（現在のチェンナイ Chennai）に関しては豊富な研究の蓄積がある。しかし、植民地時代とそれに直結する一八世紀以降のマドラスに関しては膨大な研究があるのに対して、この町の初期の歴史に重心を置いたものはそれほど多くない。とくに、一七世紀半ばから登場するマドラスという港町を、コロマンデル海岸や南インド（あるいはより広く南アジア）の都市の歴史の中に位置づけ、周辺にあった港町やその他の都市との比較や連関の視角から考察した研究はほとんど見られない。^⑥ もちろん、マドラスという都市について通史的に扱った研究の中には、この町の始まりについても詳述しているものがある。^⑦ しかし、一都市の発展史という視点からは、なぜイギリスが来るまで漁村に過ぎなかったマドラスが、一七世紀後半に急速な成長を遂げ、近隣の港町を凌ぐほどに拡大していくのかを十分に説明することは難しい。

港町としてのマドラスの発展は、東インド会社の活動によるものだけでなく、周辺地域から多くの移住者を受け入れることができたからでもある。マドラスが多くの職人や商人をはじめとする人々をひきつけたのは、その頃のこの地域一帯で戦争が多発し、不安定な政治情勢にあった中で、要塞に守られたマドラスが比較的安全だったためだと言われている。^⑧ しかし、当時、マドラスからわずか五〇キロメートルほどしか離れていないプリカットにもオランダが建てた要塞が既に在った。しかも漁村から出発したばかりのマドラスに対し、プリカットは一五世紀から主要な港町としてその名を知られていた。そして、各地の出身のムスリムやテルグ系、タミル系のヒンドゥー教徒などの商人たちが活動していた。そのような港町が近隣にあったにもかかわらず、マドラスが台頭したのは何故なのだろうか。

このような疑問から、本稿ではマドラスとプリカット、さらにより北方のマスリパトナムの三つの港町を同時に取り上げ、一七世紀から一八世紀初頭までの間にこれらの港町にどのような変化が生じたのかについて考える。とくに、オランダやイギリスが関与することによって、それまでこの地方の港町には見られなかった新たな建造物である要塞や市壁が造られようとする過程に注目し、各港町に関わる現地の政治権力や、内陸後背地を含む周辺地域の情勢の変化との関係で、

それらの建造物がどのように造られるか（あるいは造られないか）について検討する。それらの考察を通して、マドラス台頭の背景について新たな見解を示し、約一〇〇年の間にコロマンデル海岸における港町の性格がどのように変わっていったかを明らかにすることが本稿の目的である。

- ① K. N. Chaudhuri, *Trade and Civilisation in the Indian Ocean : An Economic History from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge, 1985, p. 63.
- ② Francois Valentyn, *Oud en Nieuw Oost-Indiën, veruttende een naukeurige en uitvoerige verhandelinge van Nederlands mogentheid in die gewesten*, 5 delen, Dordrecht en Amsterdam, 1724-1726, deel 1, pp.186-191.
- ③ 「コロマンデル海岸とは、語源的には「チョーラ朝の領域 (Coliamandalam)」に由来し、十六世紀には、概ね北はマドラス・トナンティ州南部の Sullurpet taluk から南はタミル・ナドゥ州中部の Thanjavur districts の辺りまでを指したことが (S. Jayaseela Stephen, *The Coromandel Coast and Its Hinterland. Economy, Society and Political System (AD1500-1600)*, Delhi, 1997, pp. 24-25) 本稿では、十七世紀の VOC の活動の中心地として、コロマンデル海岸の範圍を現在在の マドラス・トナンティ州とタミル・ナドゥ州の領域の海沿部に見なすことにする。
- ④ イギリス東インド会社について、参見せよ。K. N. Chaudhuri, *The English East India Company : the Study of an Early Joint-Stock Company, 1600-1640*, London, 1965 ; idem, *The Trading World of Asia and the English East India Company, 1600-1700*, Cambridge, 1978 などがある。コロマンデル海岸と和田については、S. Arasaratham, *Maritime Commerce and English Power : Southeast India 1750-1800*, New Delhi, 1996 などがある。トナンティについては George D. Winius and M. P. M. Vink, *The Merchant-Warrior Pacific : The VOC (The Dutch East India Company) and its Changing Political Economy in India*, Delhi, 1991 などがある。トナンデルと東洋とを扱うとして、S. Arasaratham, *Jan Company in Coromandel, 1605-1690*, s-Graevenhage, 1962 などがある。また、和田と和蘭のヨーロッパ諸國との通商と進出は、S. Arasaratham, *Om Prakash, European Commercial Enterprise in Pre-Colonial India*, Cambridge, 1998 などがある。また、そのほかトナンデルと東洋とを扱うと、例として Sinappah Arasaratham, *Merchants, Companies and Commerce on the Coromandel Coast 1650-1740*, Delhi, 1986 などがある。
- ⑤ 郷々の歴史と和田については、参見せよ。M. Arokiaswami, "Pulicat, the Dutch Town of the Seventeenth Century", *Journal of Indian History*, vol. 41, 1963, pp. 775-781 ; Sanjay Subrahmanyam, "The Pulicat Enterprise: Luso-Dutch Conflict in South-Eastern India, 1610-1640", *South Asia*, vol. 17, 1986 などがある。トナンデルと和田との通商と進出については、Shah Manzur Alam, "Masulipatam — A Metropolitan Port in the Seventeenth Century", *Islamic Culture*, vol. 33, 1959 ; Sanjay Subrahmanyam, "The Portuguese Response to the Rise of Masulipatam 1570-1600", *The Great Circle*, vol. 8, 1986 ; idem,

"Masulipatnam Revisited, 1550-1750 : A Survey and Some Speculations", in *Gateways of Asia : Port Cities of Asia in the 13th-20th Centuries*, Frank Broeze (ed.), London, 1997 ; Sinnappah Arasaratham and Aniruddha Ray, *Masulipatnam and Camboj : A History of Two Port-Towns 1500-1800*, New Delhi, 1994.

④ 同様の傾向はポルトガルカッタゴウの事例を見られる。

Aparna Balachandran, "Of Corporation and Caste Heads: Urban Rule in Company Madras, 1640-1720", *Journal of Colonialism and*

Colonial History, vol. 9, 2008, fn.1.

⑤ Henry Davison Love, *Vestiges of Old Madras 1640-1800*, 4 vols., London, 1913 ; M. Archi Reddy, *Trade and Commerce of the English East India Company in India (Madras)*, 3 vols., Ambala, 2006-4-30.

⑥ Chaudhuri, *The Trading World*, pp. 51-52 ; Prakash, *European Commercial Enterprise*, p. 148.

一 都市の類型と港町

南インドにおいては、チャョーラ朝下の概ね九世紀半ばから一三世紀後半の間に、都市化が進んだとする議論がある^①。その後のヴィジャヤナガル王国の時代には、各地のナーヤカがその領内における商業の拡大を目論んで交易や手工業について様々な振興策を取り、コロマンデル海岸とその後背地の諸都市間を結ぶネットワークが形成されていった^②。本章では、まず一六世紀以前の南インドにおける都市の類型について先行研究にしたがって概観し、内陸諸都市を含む様々な形態の都市と比較して、コロマンデル海岸の港町にはどのような特徴があったのかについて整理する。

南インドにおける都市の類型

都市の類型については、その都市の機能や発展の主要因、立地や構造の特色など、様々な視点から考えることができる。南インドに関しては、同時代の文献史料に基づいてチャョーラ朝期の都市の類型を、(1)交易の中心地、(2)王都、(3)行政都市、(4)宗教の中心地、(5)教育の中心地の五つに分類したThakurの研究がある^③。もちろん実際には、それぞれの都市は、例えば王都であると同時に交易の中心地であったり、宗教の中心地であると同時に交易および教育の中心地であるなど、複数

の機能を併せ持つものである。あるいは、都市が拡大するにつれて新たな機能が加わり、その性質が次第に変わっていくこともしばしばであった。一方、Burton Steinは、主としてヴィジャヤナガル王国の時代を想定してであるが、南インドの各都市が異なった性質を持つのは、(1)寺院、(2)行政機能(ときに軍事機能を含む)、(3)市場と手工業生産の三つの要素が様々に交じり合った結果であると見る。^④

都市の構造から見た類型としては、Jayaseela Stephenが、コロマンデル地方の内陸諸都市について、「開いた都市(open towns)」と「要塞都市(fortified towns, fort towns)」に大別できると述べている。^⑤「開いた都市」の例としては、複数の寺院都市の名が挙げられており、タンジャーヴール Thanjavurとティルパティ Tirupatiの都市プランが紹介されているが、それによると、これらの都市はいずれも寺院を中心とする地区と、その四方に放射線状に広がる基盤目状の街区を持つていたという。寺院地区には僧侶と支配者層が住むのに対して、街区は商人などその他の人々の活動の場であり、さらにその周辺には郊外地区が広がっていた。都市は寺院を中心に拡大したが、寺院とその周辺の商業などを行う街区との間には明確な区別があった。その一方で、例えばティルパティの郊外にチュッティ Chetti商人たちの集落があったように、これらの都市は、寺院を中心に商業など他の機能が加わるにつれ周辺地域に拡大しながら発展していった。

これに対して「要塞都市」としてStephenが考へるのは、支配者の建てた要塞を中心に発展した都市である。^⑥ヴィジャヤナガル王国の時代、主に北に隣接するテルグ地方からタミル地方に戦士階層の人々が多数流入したことはよく知られている。これらの移住者の中から、王によって地方の統治を任されるナーヤカ(Nayaka)として台頭した人々は、土着の権力基盤を持たないことから、軍事力を備えた要塞を統治の要として建設した。各地に造られた要塞は、基本的には政治的・軍事的拠点としての重要性を持つものであったが、やがてその周辺に商人や職人が集まり、各ナーヤカによる免税措置や職人への特権付与などの政策の影響もあって、商業や手工業の盛んな都市へと成長するものが現れたという。王都ヴィジャヤナガルは、幾重もの城壁によって囲まれたこの時代の代表的な「要塞都市」であろう。^⑦他にも、ヴェローラ

Vellore、シンジュー Gingee (Semi)、チャンドラギリ Chandragiri など、戦略的な要地に建てられた要塞を中心に、当時、経済的にも重要な都市に発展した町は多い。また、マドゥライ Madurai のように、以前から宗教的に重要な都市であったところが、一六世紀にはナーヤカによる統治の中心地として防衛強化され、要塞を備えるようになった例もある^⑤。

以上のように、一六世紀以前の南インドでは、統治の拠点や、交易の中心地、多くの巡礼者を集める大寺院など、様々な機能を核として人々が集住する都市が存在していた。では、港町は、これらの都市の一角に位置づけられるのだろうか。Thakur は、内陸の都市と港町を特に区別して論じてはおらず、交易の中心地としての都市の中に港町を含めて考えている。一方、Stein の議論は内陸諸都市に重点を置いており、港町は考察の対象に含めていないように見える。

これらに対して Stephen は、そもそも内陸諸都市と港町とを分けて論じており、それぞれ別個の性質を持つものと見なしているようである。確かに、一六世紀から一七世紀初頭にかけてのコロマンデル海岸における重要な港町の繁栄の主要因は、交易の発展であり、寺院や要塞ではなかった。勿論、港町にもヒンドゥー寺院は存在しただろうが、次に述べるように、港町の人口構成は概して内陸諸都市よりも複雑であったことから、寺院の求心力は内陸諸都市ほど強力ではなかったと思われる。また、インドの海岸に要塞が建設されることがなかったわけではないが、その頃のコロマンデル海岸の港町でナーヤカなど現地地の権力者が要塞を築いた事例は、管見の限りでは存在しない^⑥。それでは、当時のコロマンデル海岸の港町とは、どのようなものだったのか。次節では、この地域の港町の立地条件や類型、繁栄の背景について取り上げることとする。

コロマンデル海岸の港町

コロマンデル海岸は、海岸線が単調で大きな入り江や湾などがなく、一般に良港の条件とされる地形に恵まれていないと言われる。しかし、厳しい地理的条件にもかかわらず、古来この沿岸では多くの船が行き交い、盛んな交易が行われて

いた。^⑩ 抜きん出て好条件の港が存在しなかった一方で、その長い海岸に流れ込む多数の川の河口付近を中心に、多くの比較的小さな港が点在した。しかし、それらの港は、暴風雨で甚大な被害を受けたり、沈泥により港としての機能が十分に果たせなくなったりすると使われなくなることもあり、港町の栄枯盛衰が何度も見られた。

Stephenによると、タミル語の古典文献では、沿岸の町を *ur* と *patinam* の二つに大別しているという。^⑪ この分類では、若干内陸に入ったところに位置する前者が農民や職人が住む沿岸の町であるのに対して、後者は海岸に程近く位置し商人の居留地となるとされる。ヒンドゥー教徒は概ね *ur* に留まり、商業や交易が盛んに行われて大きな町に発展するのは、ムスリムの多くに住む *patinam* の方である。また、歴史上は、沿岸の村が新たな海上交易の中心地として発展するにつれ、*patinam* の語尾を持つ名称を持つようになったと考えられる事例がいくつも見られ、これらの語尾の前にはその港町の建設や発展に寄与した人物の名が冠されていた。例えば、プリカットは、ヴィジャヤナガル王国のデーヴァラーヤ Devārāya 二世の時代（一四三二—一四六）にこの地方を治めたアーナンダラーヤ *Anandarāya* という人物の下で発展し、彼の名前にちなんで *Anandarāyapatinam* と呼ばれていた。そして、ポルトガル人がこの地方にやって来た頃には、コロマンデル海岸有数の港町として知られるようになっていた。^⑫ ポルトガル人たちはこの町を当時のタミル語名 *Palaverickatu* から、*Palaequate*、あるいは *Palaeate* と呼んだが、その呼称が一七世紀以降にはオランダ語の呼び名である *Palaeatte* や英語の *Palicat* のもとになった。

世界各地の港町と同様、コロマンデル海岸においても、交易活動が港町の発展において重要な役割を果たしたことは確かである。ただし、概してここには地理的条件において突出した良港はなかったので、港における交易活動は、自然条件の変化、内陸後背地の情勢、海上交易ルートの変遷などの様々な要因による影響を受け易かった。また、たとえある時期に繁栄を謳歌した港町でも、近隣の港との競争を完全に排除することはできなかった。港は、周辺地域の権力者がいわずに盛り入れることによって港町として発展し得たが、反面、権力の交代が容易に港町の盛衰に結びつく可能性もあった。上

述のプリカットは、発展のきつかけが政治権力者によって与えられた港町のひとつであり、王都ヴィジャヤナガルとの結びつきで繁栄したが、一六世紀後半のヴィジャヤナガル王国の衰退によって打撃を受け、さらにコロマンデル沿岸各地に住み着いたポルトガル人による交易活動の拡大の影響もあって、同世紀末までには以前の活況を失っていたという。また、マスリバトナムの場合は、内陸後背地をゴールコンダ Golkonda 王国（一五一八—一六八七）が安定的に支配するようになった一六世紀末頃から発展したことが知られる。この港町は、一七世紀には都ハイダラーバード Hyderabad と内陸交通路で結ばれる一方で、海上ではポルトガルの勢力圏外の諸港を結ぶ交易ネットワークの一部として繁栄した^⑩。

インドにおけるポルトガル勢力の重心がゴア Goa を中心に西海岸に置かれていたことはよく知られている。これに対してコロマンデル海岸では、一六世紀の間に次第にプリカットやそのすぐ南のサントメ San Thomé、南方のナーガパツティナム Nagapattinam などにポルトガル人のコミュニティができるが、概して彼らの活動は西海岸を中心とする王室貿易からの独立性が高く、土着化の進む傾向があった^⑪。

これに対して、より組織的にコロマンデル海岸での貿易活動に参入したのが、一七世紀に入ってから相次いでやってきたオランダのVOCとイギリス東インド会社（East India Company：EIC）であった。それでは、彼らの活動は、上述のようなコロマンデル諸港の状況に何らかの変化を与えたのであろうか。第二章では、この二社のうち先にこの地方での活動を開始したVOCに注目し、その商館のあり方と、それらが既存の港町とどのような関係にあったのかについて考えてみたい。

- ⑩ R. Champakalakshmi, "Urbanization in Medieval Tamil Nadu", *Situating Indian History for Sarnepalli Gopal*, S. Bhattacharya and R. Thapar (eds.), New Delhi, 1986; R. Champakalakshmi, *Trade, Ideology and Urbanization: South India BC300-AD1300*, New Delhi, 1996; Renu Thakur, "Urban Hierarchies, Typologies and Classification in Early Medieval India: c. 750-1200", *Urban History*, vol. 21, 1994. 一方 Burton Stein は「都市化はおおよそ一三世紀から一八世紀までの期間の最も重要な歴史的過程であったろう」と述べ、より後の時代に都市化が進んだと見てらる。The Cambridge *Economic History of India, Volume I: c. 1200-c. 1750*, Tapan

Raychaudhuri and Irfan Habib (eds.), Cambridge, 1982, p. 452.

② Stephen, *The Coromandel Coast*, pp. 90-102 ; Kanakalatha Mukund, *The Trading World of the Tamil Merchant, Evolution of Merchant Capitalism in the Coromandel*, Hyderabad, 1999, pp. 44-46.

- ③ Thakur 氏、この分類を「都市の中心地 (urban centres)」にこのついでにこのついでに、その後の各々の類型に因する説明から、これらと本稿とをこの「都市」の類型に見なすこの差を述べた。Thakur, "Urban Hierarchies", 1994, pp. 63-75.
- ④ *The Cambridge Economic History of India*, pp. 452-454.
- ⑤ 英語の town や ロシア語の gorod が本来「壁で囲まれた場所」だけを指したのに対して、この town がその他の都市的な特徴を備えつつあるのゆえに、「fortification を持たなす town」は、必ずしも town が都市 (town) を指さす見なす条件にはならなす Stephen は言っている。
- ⑥ Stephen, *The Coromandel Coast*, p. 103.
- ⑦ Stephen, *The Coromandel Coast*, pp. 104-107.
- ⑧ 小倉泰「中世都市ウヰンジャナガル——ロマンター王都のレミアウメンの解釈——」『東洋文化』72, 1992。
- ⑨ Susan J. Lewandowski, "Changing Form and Function in the

Ceremonial and the Colonial Port City in India : An Historical Analysis of Madurai and Madras," *Modern Asian Studies*, 11, 1977, pp. 190-191.

- ⑩ サンタモニット語で城は durga と呼ばれ、「山城 (girdurga)」に「森に囲まれた要塞 (vana-durga)」なると種類に大別される。そのほか、「堀に囲まれた城 (jala-durga)」の形態として、周壁を「一方または全てが海に面した海岸の」要塞がある。P. V. Jagadisa Ayyar, "Construction of Forts," *The Quarterly Journal of the Mythic Society*, 12, 1922, pp. 367-368。また、十六世紀以降ポルトガル勢力が要塞を築いた例は複数見られる。
- ⑪ 前一世紀にローマの商人の交易活動と関わりがあった港として現在の Pondicherry 近くの Arikamedu と Cuddalore 近くの Karaikadu などがあげられた (Stephen, *The Coromandel Coast*, p. 13)。
- ⑫ Stephen, *The Coromandel Coast*, p. 107.
- ⑬ Stephen, *The Coromandel Coast*, pp. 109-110.
- ⑭ Sanjay Subrahmanyan, *The Political Economy of Commerce : Southern India, 1500-1650*, Cambridge, 1990, pp. 147-166.
- ⑮ Stephen, *The Coromandel Coast*, pp. 182-186.

二 オランダ東インド会社 (VOC) の商館と港町

コロマンデル海岸のVOC商館

VOCは、インド亜大陸の他地域に先駆けてコロマンデル海岸に最初の商館を一六〇六年に開いた。それが北部のマスリパトナムとペッドダパツリ Peddapalli の商館である。一六〇八年には、南部の二港デーヴァナムパツティナム

Devanampatinam とティルッパプリーユール Tiruppappuliyur に、さらに一六一〇年にヴィジャヤナガル王国からプリカットへの商館設置を認められ、やがてここをコロマンデル地方の主商館 (hoofdkantoor) と定めた。各地に築かれた商館は南北に大きく分けて管轄され、マスリパトナムが北部の、プリカットが南部の第一の商館とされた。同時に、プリカットには南北の全商館を統括する役割が与えられ、マスリパトナムの商館長 (president) はプリカットの総督 (gouverneur) に次ぐ、コロマンデル地方で二番目に高い地位に位置づけられた。

一七世紀の半ば頃のコロマンデル地方では、港町を中心に、内陸後背地も含めた各地に商館が点在するようになっていた。それらの商館は、その設置の目的や機能も、規模や人員の体制も様々で、プリカットのように要塞を中心とする大規模なものから、一軒の建物を賃借しているだけの小規模なものまでがあった。主商館であった頃のプリカットや、一六九〇年以降プリカットに代わって主商館となったナーガパッティナムでは、兵士を含めて数百人規模の「オランダ人」が駐在していたのに対して、駐在する「オランダ人」がわずか数名しかない商館も少なくなかった。^②

商館の数が増えるにつれ、各商館に期待される役割も次第に多様化していった。例えば、造船業が盛んであったゴードーヴァリー Godavari 川デルタ地帯のナルサプル Narsapur では、一六七五年にゴールコンダ王国スルターンの勅令によって、木工所 (timmerwerk) と鍛冶場 (smederij) を建てるための土地が VOC に与えられた。その土地の周りに VOC の人員の住居を建てることと、周辺の村落に労働者を求めることも認められた。^③ 一七世紀末には、Nagulvancha などにも釘を造る鍛冶場があり、パラコッル Palakolu にはロープ製造所 (tjinhuis) や、主要輸出品である織物の漂白所 (blekerij) や藍染色所 (blauwververij) も設置されていた。^④

要塞と港町：プリカットの場合

一六一〇年から九〇年まで VOC の主商館が置かれたプリカットは、VOC が築いたアジア地域間交易ネットワークに

において重要な役割を持っていた。そもそもVOCがコロマンデル海岸に注目した背景には、その後背地に織物の大生産地を持ち、且つ先発のポルトガル人たちの勢力が西海岸に比べて弱いという事情があった。インド製綿織物は、当時インドネシア海域でスパイスをブローター取引で手に入れる際の交換商品として欠かせないものであった。綿織物はコロマンデル海岸の多くの港から積み出されていたが、プリカットの後背地ではとくに東南アジア市場向け織物の生産が盛んであった。その上、上述のように、この港町はVOCの進出以前にもコロマンデル海岸有数の交易都市として知られていた。⁵⁾

プリカットにおけるVOCの活動は、一六一〇年にヴィジャヤナガル王の許可を得て始まった。当初、VOCが王によって認められたのは、「一軒の石の家を建てるための場所をPaliacatiaに持つ」ことであり、その「石の家」の目的は、軍需品や船の装備や商品を「火事、盗賊や泥棒その他の災難から守る」ことであった。⁶⁾しかし、シャー・バンドル (Shahbandar) などの現地の有力者との衝突や、南方に近接するサントメのポルトガル人による妨害のため、プリカットでのVOCの活動はなかなか順調には進まなかった。一六一二年六月には、プリカット商館はポルトガル人の攻撃を受け、商品を略奪された上に、上級商務員 (opperkoopman) の Adolf Thomasz 以下の駐在員が捕虜としてサントメに連行される、という事件が起こった。数ヶ月後、VOCはプリカット商館の活動を再開した。この年の一〇月、新任の商館長ファン・ベルヘム Wenmer van Berchem はヴィジャヤナガル宮廷に赴いて、一二月には新たな勅許を得ることに成功し、プリカットに要塞 (fortesse/fort) を持つことを認められた。⁷⁾

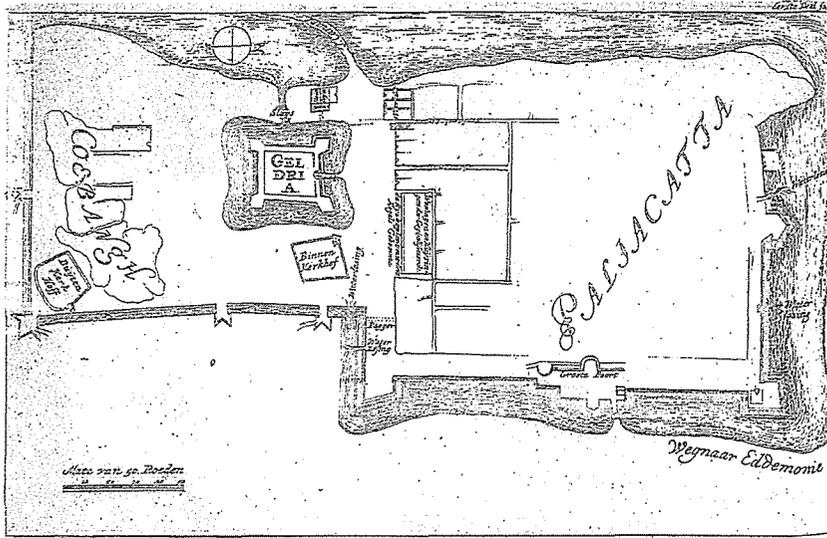
この勅許では、要塞はプリカットを領地とする妃の一人の費用によって建設され、完成後は妃の部下によって警護されること、そしてVOCは要塞の半分を利用することが定められていた。ところが、実際には妃の費用負担による建設が一向に進まなかったため、業を煮やしたファン・ベルヘムは、結局全額をVOCが負担して工事を完遂させることを決定し、一六一三年にヘルトリア城 (Kasteel Geldria) は四つの稜堡を持つ要塞として完成した。⁸⁾

このように余分な費用負担も厭わずファン・ベルヘムが要塞建設を進めた最大の理由は、商館がその機能を全うするた

めには相応の軍事力を備える必要があると考えられたためである。実際に上述のような事件が起こっていたこともあり、サントメのポルトガル人勢力が最も懸念された敵であった。ヴィジャヤナガル王国にもポルトガル人と結んでVOCに敵対しようとする人々があり、一六一三年七月、完成間もないヘルトリア城は六〇〇〜七〇〇人の軍勢による攻撃を受けた。VOCは、王やシャー・バンダルなどの援助を受けてこの危機を切り抜けたが、こうした状況の中でファン・ベルヘムは、バンテン Banten の東インド総督に対して、この新要塞の防備のために可能な限り早く一五〇人の兵士と八〜一〇基の大砲と一〇〇丁のマスケット銃を送って欲しいと要請していた^⑧。

ところで、前章で述べたように、当時コロマンデル海岸の港町に現地の政治権力者が要塞を造った事例については殆ど知られていない。ヘルトリア城の場合、勅許の文言によれば、建設費用は港町を領地とする妃とVOCとの折半で、且つ使用権も折半されるはずであったが、実際には妃の側は費用を出さなかったと言われる。しかし他方、VOCが自費で要塞を完成させることについても特段に反対や妨害をしたようにも見えない。このことや、完成後の要塞が攻撃を受けた際にVOCへの援助を約束した王の姿勢からは、港町プリカットに外来の勢力が要塞を持つことに対して強い警戒心を持っていたように思われない。その一方で、同時期の内陸各地には要塞都市が多く見られたことを考えると、現地政権にとって港町が戦略的な要地と見なされていなかったことが窺われる。そのため彼らは積極的に港町に要塞を造ろうとすることも、ヘルトリア城の出現を大きな脅威と感ずることもなく、VOCの活動を容認してはいたのではないかと考えられる。では、要塞ヘルトリア城が建設されたことは、港町プリカットにどのような変化や影響をもたらしたのだろうか。

ヘルトリア城の完成後、その防衛力を維持するためプリカットには多数の兵士が置かれるようになった。総督をはじめとする駐在員らは城内に住居を持っていたが、城内は兵士たちを住まわせられるほど広くはなかった。兵士たちは要塞の外に住んだ。これらの兵士たちの中には妻子もちも多数いた。兵士たちの全てがオランダ人（あるいはヨーロッパ人系）ではなかったとは言え、主商館時代の一七世紀のヘルトリア城の周辺には、一〇〇人を超えるオランダ人兵士とその



図：プリカットの町とヘルトリア城 (Havart, Op-en ondergang van Coromandel より)

家族が住む居住区が形成されていたと考えられる。さらに、プリカットにはVOCとの契約期間を終えた後、本国に帰らずにインドの地に残ることを選んだ人々も多数住んでいたことが知られている。^⑩

要塞を建てるにはそれだけの広い空間が必要であり、ヘルトリア城は既存の港町の中ではなく、町に隣接する土地に造られた。町と要塞の位置関係について、一七世紀半ばにプリカットを訪れたフランス人宝石商「Tavernier」は、「町と要塞の間には広く開けた空間が残されているので、要塞は町によって悩まされない」と伝えている。^⑪つまり、当時、要塞は町の外にあったことになる。ところが、その後のHavartの記述では、要塞は「町のほぼ中央に位置している」とされる。^⑫この両者の記述の違いの原因は何であろうか。実は、後述するように、プリカットにはそれまでなかった市壁が一六六〇年代以降建設された。既存の町とその外にあった要塞は、この市壁という建造物によって、周辺地域から切り離された、ひとつの区域として目に見えるようになったと考えられる。Havartはそのようにして作られた区域を目にし、そのほぼ中央に要塞を認めたのである。他方、一七世紀末までの間に要塞周辺では兵士などオラン

ダ人たちの居住区が拡大して、既存の港町と要塞との間の空間が狭まっていた可能性もある。プリカットの姿は、このように一七世紀末までの間に、要塞が隣接する港町から要塞を中心に据えた港町へと変化していったのである。

商館と港町…マスリパトナムの場合

ほぼ一七世紀を通して、プリカットに次ぐコロマンデル海岸におけるVOC第二の商館はマスリパトナムに置かれていた。マスリパトナムは、ベンガル地方のガンガー河口からコモリン岬までのインド亜大陸東岸のほぼ中央、コロマンデル海岸の北部に位置する港町である。クリシュナー川水系の河口付近にあって、VOCの船団が初めてやってきた一七世紀初頭には国際交易港として繁栄していた。

一六〇六年に開かれたマスリパトナム商館の初期の建物は一軒の借家で、そこに駐在する人員もひと桁に過ぎなかった。その後、VOCの活動が盛んになるにつれて、商館の規模も次第に拡大されたが、商館やその付置施設として利用された町の中の建物や土地は、一七世紀末まで基本的には会社によって所有されることはなく、賃貸借されていた。マスリパトナムの町には、やがてイギリスやデンマーク、さらに遅れてフランスの東インド会社がそれぞれ商館を置くことになり、それらも借料を払って利用されていた。Havattによると、当時オランダとイギリスの商館は互いに近くにあり、いずれも「王の税関 (tax-houses) から遠からぬところに」位置していた。VOCの場合、プリカット以外の多くの拠点では、商館長以下の駐在員やその家族も、会社の建物の中に住まいを与えられたが、マスリパトナムでは多数の駐在員に供するだけの十分な広さが商館の中になかったため、周辺の家々に住む者が多かった。^④

マスリパトナムのVOC商館は、一七世紀の間に次第にその規模を拡大させていったが、基本的には言わば「借り物」の商館であり、建材や様式をVOCが自由に決めることは難しかった。その点については次章において詳しく扱うこととする。ただ、ここで確認しておきたいことは、この商館があくまでも既存の港町の一部だったということである。今日ま

で残るVOCの商館日記や報告書などの文書からは、利害の対立や、ときには武力の行使を伴う衝突が起こることもあったといえ、町に住む商人やハヴァールダール(Havardar)やシャー・バンダルなどと、商館の駐在員との間には日常的な接触や交流があったことがわかる。^⑭ Havartiによると、一七世紀末にはVOCは商館に加えて町の外に「庭園(Hizumi)」を持つており、そこには倉庫が備えられ、緊急時の避難所としても利用されることが想定されていたようだが、商館の主たる機能はやはり町の中にあった。^⑮

以上、プリカットとマスリパトナムに置かれた一七世紀コロマンデル海岸におけるVOCの二つの主要な商館について、その概略を述べた。これらの商館と既存の港町との関係をその立地から比較すると、プリカットにおいては町に隣接して建てられた要塞内に商館があったのに対して、マスリパトナムでは町の中の建物が商館として使われており、一見対照的な在り方をしているように見える。しかし、見方を変えようと、これらの商館はいずれも、少なくともその開設時においては、既存の港町に対してあまり干渉しない形で設置された、と見ることができる。もしプリカットの要塞が、「Avernierの言うように、「町によって悩まされな」かったのであれば、町の方もまた、要塞というそれまでの港町にはなかった施設が町の外にできたからといって、激変を被ったというわけでもなかった。港町プリカットにとってVOCが定着して要塞が隣にできたことによる変化は(VOCとポルトガル人との争いやそれによる影響は当然あったとはいえず、例えば、この会社が新たに交易活動に加わり商人たちと関係を持ち、それまで使われていなかった土地を会社の関係者が利用するようになる中で徐々に生じていった。マスリパトナムにおいては、プリカットのような目に見える大きな建造物が建つこともなく、商館の活動開始は、せいぜい町の中に新しい商人集団が加わったという程度のことであったと考えられる。

このように、一七世紀初頭におけるVOC商館の設立は、プリカットとマスリパトナムの既存の港町に対して、根本的な変化をもたらさしはしなかった。しかし、一七世紀半ば以降、内陸後背地の変動とも連動して、コロマンデル海岸の港町

にも変化が生じ始める。そのような中で、従来とは異なるかたちで発展するのがマドラスである。次章では、このマドラスの登場と、プリカットおよびマスリパトナムで見られた変化について取り上げる。

- ① VOCの人員の中には、当時のオランダ共和国外の出身者が相当数含まれており、とくにドイツ諸邦の出身者が多かった。その割合については時期による変動があるが、VOCが存在した全期間についての平均値では、水夫の四〇％、兵士の六〇％がオランダ共和国外の出身者であった (Femme S. Gastra, *The Dutch East India Company: Expansion and Decline*, Zutphen, 2003, pp. 80-81)。本稿では「(オランダを離れた上で、VOCに勤務したヨーロッパ系の人々を「オランダ人」と見なす)とする。なお、VOCに勤務したドイツ系の人々については、Roelof van Gelder, *Het Oost-Indisch avontuur: Duitsers in dienst van de VOC (1600-1800)*, Nijmegen, 1997を参照。
- ② 例えば、一六七〇年から人員が駐在するようになった内陸の Naguyancha (以下、下級随務員 (onderkoopman) 簿記係 (boekhouder) された助手 (assistent) が各一帖だけ派遣された (Pieter van Dam, *Beschryvinge van de Oostindische Compagnie*, F. W. Stapel (ed.), 2^{de} boek deel 2, 1932, p. 162)。
- ③ *Corpus Diplomaticum Neerlandico-Indicum*, J. E. Heeres and F. W. Stapel (eds.), 5 delen, 's-Gravenhage, 1907-1955, deel 3, pp. 16-17, 34。ナルサールの造船業については Sanjay Subrahmanyan, "A Note on Narsapur Peta — A Syncretic Shipbuilding Centre in South India, 1570-1700", *Journal of Economic and Social History of the Orient*, vol. 31, 1988を参照。
- ④ Daniel Havart, *Op-en ondergang van Coromandel*, 3 delen, Amsterdam, 1693, deel 3, pp. 4-14。
- ⑤ Mukund 以下を「一五世紀の列夫史料に基づいてタミル地方北部の主要な港として、サトラス Sadras とプリカットの名が挙げられている」とする (Mukund, *The Trading World*, p. 46)。また、一六世紀初めのホルトガルの史料では、プリカットの繁栄の様子が伝えられており (The Book of Duarte Barbosa, Mansel Longworth Dames (tr.), 2 vols, 1918-1921 [reprint: New Delhi, 1989], vol. 2, pp. 129-132)。
- ⑥ *Corpus Diplomaticum*, deel 1, pp. 83-85。
- ⑦ *Corpus Diplomaticum*, deel 1, pp. 100-104; L. C. D. van Dijk, *Zes jaren uit het leven van Wemmer van Berchem, genuld door iets over onze vroegste betrekkingen met Japan*, Amsterdam, 1858, pp. 20-21, 24-27; Raychaudhuri *Jan Company*, p. 22。
- ⑧ Van Dijk, *Wemmer van Berchem*, pp. 29-30; Raychaudhuri, *Jan Company*, pp. 22-23。
- ⑨ Van Dijk, *Wemmer van Berchem*, pp. 30-31; Raychaudhuri, *Jan Company*, p. 23。
- ⑩ Tavernier は一七世紀半頃のホルトリア城には約二〇〇名の守備隊がいたと述べている (Jean-Baptiste Tavernier, *Travels in India*, V. Ball (tr.), 2 vols, New Delhi, 1995, vol. 1, p. 214)。一六七八年に費用節減策の一環としてホルトリア城の守備隊は削減されたが、その時点でも十官一三人に減った兵士三〇人の他に一〇〇人のオランダ人兵士がいたと述べている。削減される前には一〇〇人以上のオランダ人兵士がいたと思われる。戦時に備えて四〇〇人の守備隊が置かれていたことを Tavernier は述べている (Raychaudhuri, *Jan Company*, p. 201; Van Dam, *Beschryvinge*, pp. 117-118)。
- ⑪ Tavernier, *Travels in India*, vol. 1, p. 214。プリカットには「今

多くのオランダ人の墓が残る。ロマンデル各地のオランダ人の墓に
 1511-1512 Marion Peters. *In steen geschreven : Leven en sterven van*
VOC-dienaren op de Kust van Coromandel in India. Amsterdam,
 2002年詳し。

⑭ Tavernier. *Travels in India*, vol. 1, p. 214. なお、ヘルトリマ城は
 既存の港町の北側に位置していた。

⑮ Havart. *Open ondergang van Coromandel*, deel 1, p. 105.

⑯ 一六七六年にMasterは、オランダ人がフリカットで「彼らの近隣
 にある家々や土地を盛んに買い込んだ彼らの商館を拡大している」
 伝えている (*The Diaries of Streynsham Master 1675-1680*, Richard
 Carnac Temple (ed.), 2 vols. London, 1911, vol. 1, p. 297)。

⑰ *Relations of Golconda in the Early Seventeenth Century*, W. H.
 Moreland (ed.), London, 1931 [reprint: Nendeln, 1967], p. 55.

三 港町における要塞と市壁の建設

セント・ジョージ要塞の建設：マドラス

かつてマドラスの名で知られたチェンナイは、現代ではその都市圏にインド共和国第四位の六五〇万人超の人口を抱える大都市となっている(二〇〇一年統計)。しかし、一六三九年にアールムガム Arumugam (Armagam) のEIC商館長デイ Francis Dayが、当時この地の周辺を支配下に置いていた領主(ヴィジャヤナガル王の「義理の兄弟」)から借り受け、要塞建設の許可を得たとき、この地は僅かに数世帯の漁師らが住む漁村に過ぎなかった。

翌一六四〇年、デイはEICのマスリパトナム商館長コーガン Andrew Coganと共にマドラスに上陸し、それから十日足らずの間に、セント・ジョージ要塞(Fort St. George)の建設が開始された。①最初の稜堡はその年のうちに完成し、一

⑱ Havart. *Open ondergang van Coromandel*, deel 1, pp. 141-146, 222-223 ; Van Dam. *Beschryvinge*, pp. 151-152 ; Raychaudhuri. *Jan Company*, pp. 204-205.

⑲ 一六二〇年代のマスリパトナム商館日記によれば、和田郁子「インド・コルコンダ王国の港市マスリパトナム——一七世紀前半のオランダ商館の日記を中心に」『港町に生きる』、歴史学研究会編、青木書店、二〇〇六年を参照。ハヴァールダールとは、毎年まとまった額の金を払うことにより徴税をはじめとする業務を請負っていた役職者で、ヨーロッパ語史料ではしばしば「総督 (gouverneur/ governor)」と呼ばれる(和田郁子「マスリパトナムのハヴァールダール——一七世紀前半コルコンダ王国の交易港支配に関する一考察」『西南アジア研究』五七号、二〇〇一年)。

⑳ Havart. *Open ondergang van Coromandel*, deel 1, p. 146.

六四一年、要塞建設が続けられる中でE I Cのコロマンデル海岸における主商館はマスリパトナムからマドラスに移された。

デイやコーガンの反応はこのように素早かったが、対照的にジャワ島のバンテンやインド西海岸のスーラト Suratt の E I C 商館では、マドラスの獲得と要塞建設の意義について懐疑的であった。そのため、デイらは要塞の建設費用捻出に苦勞した^②。それでも彼は、この地が三方を川と海に囲まれ、要塞の立地に適した地形であること、要塞建設の認可に加え、免税などの特権を現地の領主から得られたこと、そして、周辺に各種の綿織物の生産地があり、それらが割安に入手できる可能性があることなど多くの利点を持っており、将来性が十分にある土地だと確信していた。

実際に綿織物入手するために E I C が採用した方策のひとつは、「チーフ・マーチャント (Chief Merchant)」と呼ばれる独占的な仲介商人を通して必要な商品を確保することであった。類似の仕組みは既にプリカッタなどの V O C 商館においても見られたが、ちょうど一六四〇年代から V O C は少数の独占的商人を仲介者とする体制を改め始め、新たな仕組みによる商品調達を試みるようになった^③。一方、マドラスでは、チーフ・マーチャントに依存する体制がより長く続けられた。初期のチーフ・マーチャントである Sesatra Chetu は、かつてプリカッタなどで V O C と数十年にわたって協力関係にあった商人の家系に連なっていた^④。彼を含めマドラスでの取引に参入した商人たちは、周辺地域から移り住んだ人々であった。

織物獲得のためのもうひとつの方策は、マドラスへの職人の移住をすすめることであった。商館開設から程なくして、デイはチーフ・マーチャントを通じて、織物職人をはじめとする周辺の職人・商人らがマドラスに居住するよう取り計らった。さらに、一六八七年からマドラスの総督 (Governor) となったイェール Elihu Yale は、このような職人集団の移住がより組織的に進むように努めた。そして、一六九〇年には、約五〇家族の上質布専門の織物職人カーストをマドラスに移住するよう説得することに成功した。また、居住区の住民を増やすため、E I C は近隣のサントメに住むポルトガル系

居留民に対し、マドラスへの移住を促す策も取った。^⑥

周辺各地からの人々の移住が進むにつれ、かつては寒村に過ぎなかったこの地は、要塞を中心とした町になっていった。町の拡大は、居住区の周囲にめぐらされる壁の建設と連動して進んでいった。セント・ジョージ要塞が完成するのは一六五三年のことだが、それに先立つ一六四四年から四八年の間には、当時あった町全体を取り囲む塁壁が造られた。要塞が完成すると、続いて外城の建設が始まり、一六五七年に完成した。この外城の内側が後に「ホワイト・タウン (White Town)」と言われるようになる部分であり、これに隣接する「泥の壁で囲まれた」区域が後の「ブラック・タウン (Black Town)」であった。^⑥

一七世紀末には、既に城壁で守られていたホワイト・タウンに対して、ブラック・タウンの周囲にも、より強固な市壁を築こうとする動きが起こってくる。当時総督であったイェールは市壁建設推進の立場であり、マドラス市参事会の中にあつた、費用負担への懸念などに基づく反対意見を抑えて「泥の壁」を芝土で固める工事を開始した。しかし、その工事は折からのモンスーンにより頓挫し、結局、市壁の建設は、ブラックタウンの住民から徴収された金を使って行われることになった。そして一七〇七年には、稜堡を備えた厚さ一七フィートのレンガ製の塁壁が完成した。^⑦この頃までには、マドラスはEICのみならず、イギリス人の私商人やユダヤ人・アルメニア人・ポルトガル系などの様々な出自の商人たちが活動する港町に成長していた。

このようにして要塞を中心に町がつくられていったマドラスは、当時のコロマンデル海岸の港町としては異例の存在であつた。確かに、セント・ジョージ要塞の建設が始まった頃、コロマンデル海岸にはプリカットやサントメのように要塞を伴う港町が存在した。しかし、二で述べたように、プリカットでは港町がまず発展し、要塞は既に在った町の隣に後で建てられた。またサントメは、一五二〇年代以降にポルトガル人によるキリスト教の「聖地」化が進められ、一六世紀後半になってから交易活動が活発化する中で発展した町だが、一七世紀初めまでは要塞化されていなかった。^⑧それに対して

マドラスでは、要塞と町の建設が同時に進められた。さらに、町の拡大はその周囲への壁の建設を伴っていた。一で見たように、南インドにおいても市壁を持った都市が存在しなかったわけではないが、市壁は権力者の拠点である内陸の都市で限定的に見られるのが普通であった。当初から市壁があり、町が拡大するにつれてさらに次々と壁が建設されたという点においても、マドラスの発展の様相は当時のコロマンデル海岸の港町としては際立って特徴的であった。

ところで、コロマンデル海岸とその内陸後背地では、一六四〇年前後から大きな政治的変動が起きていた。その変動に伴う社会の混乱は、セント・ジョージ要塞とその周囲の市壁の建設を殆ど矢継ぎ早に進めていったコーガンやデイ以来のマドラスの指導者たちにとってもきわめて切実な問題であった。もちろん、後発のEICにとって、VOCが既にこの地方で得ていた交易上の優位と、ヘルトリア城に象徴される軍事力が脅威であったことは間違いない。しかし、マドラスが単にEICの要塞都市としてではなく、アジア域内交易（いわゆるカントリー・トレード）に従事する商人たちの活動拠点として、一七世紀末までの間に急速に発展したことを考慮するならば、港町マドラスを取り巻く現地社会において何が起っており、近隣の港町でそれに対してどのような反応が見られたのかについても考える必要があるだろう。そこで、次節ではプリカットの状況と絡めながら、一六四〇年代以降のコロマンデル地方で何が起こっていたのかについて見ていくことにする。

コロマンデル地方の政治的混乱とプリカットにおける防備強化

一五六五年、ラクシャシ・タンガデイ（タリーコトク）の戦いにおいて、デカン地方のムスリム五王国連合軍がヴィジャナガル王国軍を破った。それから一六三〇年代までの間、コロマンデル海岸とその内陸後背地では、概ねクリシュナー川の南側を係争地としながら、ゴールコンダ、ヴィジャナガルの両王国が北と南に領土を分け合っていた。しかし、一六三六年、それまで残っていたムスリム王国三国のうち最小のアフマドナガル王国が、ムガル朝によって遂に滅ぼされ

たことで、それまでの構図に変化が生ずる。この年、ムガル皇帝シャー・ジャハーン Shah Jahān は、残ったデカンの二王国ビージャーブル Bijapur (一四八九—一六八六) およびゴールコンダのそれぞれとの間に条約を結び、両王国のスルターンたちにムガル朝の宗主権を認めさせた。これによってデカンの両王国は独立を失い、ムガル朝への貢納を求められることになったが、反面これによってムガル朝との関係は安定化した。以後、両王国は北辺への侵略の心配をすることなく、南方への領土拡大を目指して征服事業を展開し始め、プリカットをはじめとする多くの港町を含むコロマンドル海岸中南部は、その影響を真っ先に受けることになった。

まず、ビージャーブル王国の軍隊が、ヴィジャヤナガル王国の中心部に攻め入った。ビージャーブル軍は、ヴィジャヤナガル王ヴェンカタ Venkata 二世の甥で王位を狙っていたシュリーランガ Srīrāṅga と手を組み、一六四一年にはヴェールにまで侵攻したが、このときはマドウーラ、タンジャーヴール、ジンジの有力ナーヤカたちの援軍が間に合つて、ビージャーブルの進攻を食い止めた。^⑨翌二六四二年、今度はゴールコンダ軍が南方への遠征を開始し、プリカットからアールムガムまでの沿岸部に攻め入った。当時サル・ハイル (sarkhāy) の地位にあったミール・ムハンマド・サイード Mir Muhammad Sa'id に率いられたゴールコンダ軍は、プリカット湖と海の間の大島 Srinārikōta を占領し、それから北方に転じて要衝の地ウダヤギリ Udayagiri の要塞を手に入れた。^⑩ヴェンカタ三世は一六四二年に死去し、王位を継いだシュリーランガは、報償を受けるためムハンマド・サイードが戦線を離脱していた間に、一時ウダヤギリの要塞を取り戻した。しかし、一六四五年、戦線に復帰したムハンマド・サイードはこれを再び占領した後、さらに多くの要塞を陥落させ、一六五〇年には難攻不落の地として知られたガンディコタ Gandikōta の要塞を征服した。そして、ゴールコンダ王国の主要地域の南方に、沿岸部へ向かつて広がる彼自身の勢力範囲が築かれていった。^⑪プリカットやマドラスはこのムハンマド・サイードの勢力範囲の中にあつた。

しかし、強大になりすぎた重臣の力を警戒したゴールコンダのスルターン、アブドゥッラー 'Abd Allāh とムハンマ

ド・サイードの間にやがて不和が生じ、ムハンマド・サイードはゴールコンダ王国を去ってムガル朝に仕えることになった。ムハンマド・サイードの転身は、沿岸部に彼が築いた勢力範囲の領有権がどこに帰属するのか、という問題を生むことになった。既に長らく積極的な交易活動を展開してきた経験をもつ彼は、プリカットをその活動拠点として維持するつもりで代理人を残していた。しかし、ムガル朝内部の皇位継承戦争が激しくなる中で、ムハンマド・サイードとムガル朝のこの地域への影響力は低下していき、一六五八年、後にニークナム・ハーン Niranam Khan の称号で知られるようになるゴールコンダ王国の武将が改めてこの地方を占領した。^⑫

周辺の政治情勢がめまぐるしく変転する中で、プリカットのVOC商館では、如何にして会社の利益を守り、交易拠点を維持するかを考え、対処を迫られることになった。権力者が交代すれば、新しい権力者との関係を良好にすることがまず求められた。^⑬しかし、誰が権力の座を保持するか分からない不安定な状況では、不測の事態に備える必要もあった。一六六〇年代以降、ヘルトリア城では防備の増強が進められていた。例えば、停泊地に面した側にあつた木製の岸壁は、本来は荷物の積み降ろしのために作られていたものだったが、そこに大砲を配備できるように補強が施された。要塞の内部には、新しい弾薬貯蔵用地下室が造られ、おそらくは籠城の際に備えて、飲料水用の水がめを置いておく必要があるとも思われていた。^⑭これらの準備が進められた背景には、イギリスとの戦争への懸念もあった。

プリカットの町に対する防衛の必要性も痛感されていた。一六六〇年には、ニークナム・ハーンは「住民たちの費用で」プリカットの町の周囲に「石の壁」を建てることを一旦は認めたが、その後、建設準備が既に始められていたにもかかわらず許可を撤回した、と伝えられた。^⑮一六六五年になって漸く市壁の建設が始められ、その年のうちに町は壁で囲まれたが、それはヘルトリア城の総督スパールマン Cornelis Speelman の目には大したものとは見えなかった。一六六〇年代末からマドラスをはじめインド各地で過剰化したバウリー Thomas Bowrey も、マドラスとプリカットを比べて「我々「マドラス」の外壁は彼らのものを遙かにしのぐ」と述べている。^⑯

一六七〇年代から八〇年代にかけて、コロマンデル地方の政治情勢がますます混沌とする中、プリカットにおける防備強化は続けられた。¹⁷⁾ 一六七六年、その数年前にマラーターの王位に就いていたシヴァージー Shivan が、コロマンデル地方南部のビジャールプルの占領地に攻め入った。VOCは、戦いに勝利したシヴァージーから、デーヴァナムパッティナムなどでの活動に関する勅許を得るが、情勢が安定する間もなく八〇年にシヴァージーは死去する。翌八一年、アウラングゼーブ Aurangzib 帝が率いるムガル朝軍が最終的なデカン以南の平定に乗り出し、戦火が拡大する中で、オランダの一七人重役会 (Heeren XVII) が査察に派遣したファン・レーデ Adriaan van Rheeдеは、現地の大方の反対意見にもかかわらず、VOCのコロマンデル主商館をプリカットから南方のナーガパッティナムに移すことを決定し、一六九〇年にその決定は実行された。¹⁸⁾

以上のように、一六四〇年代以降、コロマンデル地方の中南部は大きな混乱に巻き込まれていった。その間プリカットにおいては防備強化が進められたが、それには様々な限界があった。その主な要因は、VOCはヘルトリア城を持つてはいたが、プリカットの町そのものを租借あるいは領有してはいなかったことであつた。例えば、上でも見たように、プリカットのVOC駐在員たちがおそらくその必要性を強く感じていたと思われる市壁の建設についても、ニークナム・ハーンの判断が優先されるべきとされた。その後実際に造られた壁についても、スペールマンが不満を表明していることから、その工事にあつてVOCは主導権を握つてはいなかつたと考えられる。

このような困難な状況にあつてVOCは、プリカットを完全に領有しなかつたようである。既に一六五一年にムハンマド・サイドのもとを訪れた使節ストウール Dick Seur は、プリカットの町の租借の可能性について尋ねていたが、これは「Mitsumela [Mir Jumla (ムハンマド・サイドのこと)] 氏によって短い言葉で拒絶された」。情勢がさらに厳しさを増していた一六八〇年代においても、相当額を支払つてもプリカットの町を領有したいと考えていたことが伝えられている。¹⁹⁾

政治の不安定化による混乱は、当然のことながらコロマンデル地方一帯のその他の商館や拠点における活動にも影響を及ぼしていた。それでは、この地方のVOCのもうひとつの重要商館とされたマスリパトナムでは、この時期どのような対応がなされていたのか。次節ではこの点について見ていくこととする。

マスリパトナムの「石の商館」と現地政権

ゴールコンダ王国の領内にあったマスリパトナムでは、混乱の兆しはプリカットなどの中南部の港町よりも若干遅れて表れた。マスリパトナムは一六三〇年代半ばから前述のムハンマド・サイードの強い影響下にあったのだが、彼がゴールコンダ王国を去った後も、南方で見られたような領有権争いが生ずることはなく、引き続きゴールコンダ王国の港として機能していた。^②

さて、二で見たように、マスリパトナムの商館は町の中にあり、その使用権は建物や土地に対して貸借料を支払うことによって確保されていた。そのため、たとえVOCが商館の設備の変更を望んでも、許可を得ずに勝手に勝手をすることはできなかった。とくに建物の建替えや敷地の拡大の必要性が強く感じられるようになった一七世紀半ば以降には、このことが大きな問題になった。例えば、先述の使節ストゥールは、ムハンマド・サイードとの会談の中で、「マスリパトナムの我々の商館の建物 (*loggia*) に隣接する空き地を板で囲み、織物や布を火事から守れるような会社の倉庫に適する高さの石造りの壁を備え、さらにその上に商館長たち (*opbehoofden*) と商務員たち (*copluisjen*) の住居のための木造建築を建てること」を求めたという。^③ つまりストゥールは、使いたい敷地や建材、建物の高さや目的に至るまでを具体的に説明した上で、その建設の是非を尋ねているのである。

この要望は、ムハンマド・サイードには認められたが、スルターンには拒絶されたため、「マスリパトナムにおける石造りの耐火性の住居の建築」は行われなかった。^④ VOCはその後も事あるごとに繰り返し「石の倉庫」や「耐火性の商

「館」の必要性を訴え続けた。一六六五年六月にマスリパトナムで大火事があつた際には、スペールマンが、これで王に対して「耐火性の商館の建物」を求める十分な理由ができた、とも言ったという。²⁴⁾しかし、この火事後も「耐火性の商館」は建てられなかった。一六六九年には、火事の危険に備えて倉庫を造ることをハヴァールグールに認められたものの、それは町の外であつた。しかも、スルターンの命令により、その建設許可は取り下げられてしまった。²⁵⁾「石の商館」は結局、一七世紀中には建てられなかった。Havartiの伝えるところによると、一六七九年一〇月に激しい嵐と大洪水がこの町を襲つたとき、木造の商館の建物は風と水の力によって破壊されてしまい、周囲の建物も流されるなどの大きな被害を受けた。そして、ゴールコンダ王国滅亡後の一六八九年時点でも、VOCのマスリパトナム商館は「モルタルで覆われた薄いヤシ材の板」で造られていた。²⁶⁾

一六八六年七月、ゴールコンダ王国内の政変の煽りを受けて被つた損失をきっかけに、VOCはスルターンと対立し、セイロン島から送られた兵士四六〇人をマスリパトナムに上陸させて、この町を占領した。そして直ちに町の陸側に壁を築き、ゴールコンダ軍との戦いに備えた。しかし、当時ムガル朝の強い圧力を感じていたゴールコンダ王国には、東方の港町に兵を割く余裕はなく、本格的な戦闘は行われなかった。一月、VOCはマスリパトナムとブリカットの関税の一部を受け取ることを条件に、マスリパトナムの町の返還に合意した。ところが、その翌年九月にゴールコンダ王国は滅亡し、マスリパトナムはムガル朝の支配下に入った。²⁷⁾ムガル朝による征服は政情の安定化をもたらさず、マスリパトナムの交易活動も振るわなかったが、この混乱期の中に、VOCはマスリパトナムの商館を建て直し、漸く緊急時の守りになるような建物を手に入れることができたのである。²⁸⁾

「石の商館」をめぐる以上のような経緯は、マスリパトナムの町の中にある商館の防衛強化という課題がVOCにとって如何に困難であつたかを示している。VOCはこの借り物の商館に、若干の兵士を配置して警備させることはできたが、建物を要塞化することはおろか石造りに建替えることもままならなかった。しかし、マスリパトナムがゴールコンダ王国

随一の港町であったことを考えれば、周囲の建物よりも強固な「石の商館」をVOCが持つのを現地政権が認めなかったことは不思議ではない。一六六〇年代には、スルターン・アブドゥッラーが出資する「王の船」は、マシリパトナムを拠点としてインド洋の東西両海域に広く航海していた^⑧。また、ムハンマド・サイードの離反後も、ゴールコンダ王国の有力者たちの中には交易活動に積極的に関与しようとする人々がいて、マシリパトナムは彼らの利害も絡むところであった。当時、VOCは商館を運営してはいたけれども所有してはいなかった。VOCが市壁や商館を新たに建てられたのは、現地の政治権力に対して(たとえごく短期間にせよ)優位に立つか、政情が混乱した隙間を縫うことができたときであった。

- ① Love, *Vestiges of Old Madras*, vol. 1, pp. 25-26°
- ② Love, *Vestiges of Old Madras*, vol. 1, pp. 35-46.
- ③ VOCは一六五〇年代には「フリカントの "gezelschap" と呼ばれる仕組を導入れた。それは、ある特定の種類の織物をVOCに供給する商人たちに出資金を出させ、それらを集めるとまった額の資本金とし、元手に職人たちに支払う前金などに充てられるものだった。のべ改良を加えられ次第に広まっていた。Raychaudhuri, *Jan Company*, pp. 146-148; Arasaratnam, *Merchants, Companies and Commerce*, pp. 239-241; J.J. Brenig, "Joint-Stock Companies of Coromandel", in *Age of Partnership*, ed. Blair B. Kling and M.N. Pearson, Honolulu, 1979, pp. 71-96; Mukund, *The Trading World*, pp. 73-75.
- ④ 上の商人家系の活動については、以下の研究に詳しく。Joseph J. Brenig, "Chief Merchants and the European Enclaves of Seventeenth-Century Coromandel", *Modern Asian Studies*, 11, 1977; Subrahmanyam, *The Political Economy*, pp. 298-314; ほか、Mukund は彼らに加えて、その近隣のカーナート・ポーキヤントの商人家系についても詳しく。Mukund, *The Trading World*, pp. 53-75, 103-167°
- ⑤ Love, *Vestiges of Old Madras*, vol. 1, pp. 34-35, 547-548; Mukund, *The Trading World*, pp. 121-122; Lewandowski, "Changing Form and Function", pp. 199-200; 重松伸司「フレンチス物語」中公新書「一九九三年」一八三-一八五頁。
- ⑥ Love, *Vestiges of Old Madras*, vol. 1, pp. 204-207, 387-389.
- ⑦ Love, *Vestiges of Old Madras*, vol. 1, pp. 540-542, 568-570, vol. 2, pp. 7-12
- ⑧ 重松「フレンチス物語」一三三-一三八頁°
- ⑨ M.A. Naveen, *External Relations of the Bijapur Kingdom (1489-1686 A.D.)*, Hyderabad, 1974, p. 128.
- ⑩ コーロンタスのスルターン Abd Allah せうたの職業に際して、M. K. Sherwani, *History of the Qutb Shahi Dynasty*, New Delhi, 1974, pp. 455-458; Jagadish Narayan Sarkar, *The Life of Mir Jumla: The General of Aurangzeb* 2nd edition, New Delhi, 1979, pp. 27-34.
- ⑪ Sherwani, *History of the Qutb Shahi Dynasty*, pp. 441, 458-459; Sarkar, *The Life of Mir Jumla*, pp. 34-51.

- ⑫ 和田郁子「ミール・ムハンマド・サイードと港市マスリパトナム——コールコンタ王国時代のミール・シェムラによる交易活動と港市支配——」『西南アジア研究』第68号、二〇〇八年、五五―五八頁。
- ⑬ 例えば、ブリカッタでの交易などに関する権利は、従来「Carnaticaの王」すなわちマニジャヤナガルの名で認められていたとされている。しかし、一六四七年一月一日発効の“couwell” (gawil) は「コールコンタ王の幾びも nabab Mersumala」すなわちムンペン・サイーンが与えたものである。Corpus Diplomaticum, deel 1, pp. 486-490.
- ⑭ Overgekomen brieven en papieren, Verenigde Oost-Indische Compagnie (henceforth OBP VOC) 1254, Nationaal Archief. 's-Gravenhage, Memorie van overgawe: Governor Cornelis Speelman aen Anthonij Pavlijoen, 17 Oct 1665; *Generale Missiven van Gouverneurs-Generaal en Raden aan Heren XVII der Verenigde Oostindische Compagnie*, 11 vols., 's-Gravenhage, 1960-, vol. 3, p. 553.
- ⑮ *Generale Missiven*, vol. 3, p. 337.
- ⑯ *Dagh-Register gehouden int Casteel Batavia*, J.E. Heeres et al. (ed.), 31 vols., 's-Gravenhage, 1887-1931, Anno 1665, pp. 98-274; Thomas Bowrey, *A Geographical Account of Countries round the Bay of Bengal, 1669-1679*, Richard Carnac Temple (ed.), London, 1905 [reprint: New Delhi, 1997], pp. 51-53.
- ⑰ 七二年にはヘルトリア城の守備隊を増強するため、セイロン島から

おわりに

本稿では、要塞、市壁、「石の商館」に注目して、一六〇六年にVOCの最初の商館が開かれてからマドラスでブラックタウンを囲む市壁ができる一七〇七年までの約一〇〇年の間に、ブリカッタ、マドラス、マスリパトナムというコロマ

五〇人の兵士が異動させられた (*Generale Missiven*, vol. 3, pp. 830, 857)。

- ⑱ Raychaudhuri, *Jan Company*, pp. 71-74.
- ⑲ OBP VOC 1191, *Daghregister van Ambassadeur naar Gandikota en Golconda*, 1651-52, ムンペン・サイードが従来より交易活動に深く関わっていたことを、この少し後にオランダから船を送り出していることに鑑みれば、港町ブリカッタの租借を即断拒絶したのも頷ける。和田「ミール・ムンペン・サイーン」参照。
- ⑳ *Generale Missiven*, vol. 4, p. 396.
- ㉑ 和田「ミール・ムンペン・サイーン」五八―五九頁。
- ㉒ OBP VOC 1191, *Daghregister van Ambassadeur*.
- ㉓ *Dagh-Register*, Anno 1661, p. 324.
- ㉔ *Dagh-Register*, Anno 1665, p. 275.
- ㉕ *Generale Missiven*, vol. 3, p. 692.
- ㉖ *Havart, Op-en ondergang van Coromandel*, deel 1, pp. 145, 196-205; Van Dam, *Beschryvinge*, pp. 146-146.
- ㉗ Subrahmanyam, "Masulipatnam Revisited", pp. 51-53.
- ㉘ *Generale Missiven*, vol. 6, pp. 249, 309-310.
- ㉙ 和田郁子「インデ・コールコンタ王国における君主と港市・海上交易の關係——スルターン・アブドゥッラー(一六二六―七二)の治世を中心に——」『東洋史研究』第66巻、二〇〇七年参照。

ンデル海岸の港町で何が起こっていたかについて述べてきた。

コロマンデル海岸では、これより前の時代にも政治権力者などによる一種の外部からの挺入れが港町の発展に寄与した事例は珍しくなかったし、交易が盛んになるにつれ、各地から商人などがやってきて定住することも、関税収入をはじめとする利益を期待した権力者にとつては歓迎すべきことであつた。その点では、VOCにプリカットやマドラスでの商館開設を許可したときも、EICにマドラスでの活動を認めたとときも、現地の王や領主にしてみれば、それまでの慣例から大きく外れることをしたわけではなかつたと言える。

VOCがヘルトリア城を築いたとき、既存の港町に要塞が隣接するようになったが、まだその時点では港町のあり方が大きく変化したわけではなかつた。VOCがコロマンデル地方においた多くの拠点の中で主要な役割を果たした商館が置かれたプリカットとマスリパトナムは、本来、それぞれ現地の王国の首都と結びついて発展した港町だつた。これらは既に様々な商人の活動の舞台であり、周辺地域を支配する政治権力者の利害も絡むところであつた。そのような港町で交易を行つて利益を得るため、VOCは、ときには彼らと衝突しつつも、交渉や妥協など四十八手を尽くして商館の維持に努めてきた。

これに対して、EICが来る以前のマドラスは一漁村に過ぎなかつた。EICはここに要塞を建設すると同時に、市壁を持つた町を造ろうとした。ちょうどその時期、周辺の情勢が混乱する中であつて、VOCもプリカットやマスリパトナムで防備強化の必要性に迫られていた。しかし、既存の港町には既存の秩序と体制があり、現地の権力者の関与があつた。それらの仕組みや人々との間で折り合いをつけながら、交易の利益を上げてきたVOCが、築き上げてきた関係を切り捨ててまで市壁建設や商館の改築を強行することは難しかつた。VOCが一度は占領して見せたマスリパトナムの町を結局すぐに返還してしまつた一六八六年の事件は、これに続くナーガバッティナムへの主商館の移動と同様に、VOCが武力行使を極力排して交易の利益を優先するというコロマンデル海岸における従来の活動方針を転換できなかつたことを示し

ている。一方、漁村に過ぎなかったマドラスには、既存の港町であるプリカットやマスリパトナムで見られたような利害関係者も存在しなかった。E I Cがマドラスで要塞を建て、外城を築き、市壁を造ることができた背景には、このような事情があったと考えられる。

一六四〇年代から一八世紀初頭までの間に、コロマンデル海岸の港町をめぐる情勢は大きく変化した。周辺地域では戦いが相次ぎ、政情はますます不安定になっていた。その政治的間隙を縫うようにして、E I Cは要塞を中心に、強固な市壁を持ったマドラスという町を登場させることができた。他方で、長らくコロマンデル海岸中部の主要な港町であったプリカットでは、市壁の建設が遅れ、漸く造られた壁も十分に強固ではなかった。V O Cが主商館を移動したことによって、要塞の防備も削減された。このような情勢変化の中で、安全な活動場所を求める商人たちは、やがて強固な市壁に囲まれた港町にひきつけられるようになった。マドラスが周辺地域からの移住者を吸収して拡大したのと同様に、フランスによって市壁で囲まれたボンディシエリも、一八世紀初めには交易の盛んな港町に成長した^①。E I Cはマドラスの土地を当初、現地の政治権力者からの租借で手に入れたが、その後には造られたものは、従来のこの地方の港町である *patinam* ではなく、周囲を壁で囲まれた *korodda* だった。そして、そこに周辺地域から移住してきた人々の活動が加わることによって、コロマンデル海岸の港町の新しい形がつくられていったのである。

① John F. Richards, "European City — States on the Coromandel Coast", in *Studies in the Foreign Relations of India (From the Earliest Times to 1947)*, P. M. Joshi and M. A. Nayeem (eds.), Hyderabad, 1975, p. 512.

【付記】 本稿は平成二三年度科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究) 課題番号二三六五二二七一による成果の一部である。

(京都大学文学部非常勤講師)

officials wrote down this list indicates the royal representatives were apparently able to consult some inquisitorial records, which were kept in the inquisitorial archives. Documents that were once produced and preserved by the inquisitors to condemn heretics were then admitted as evidence by the king to save the past heretics or their heirs.

In fact, the preservation and protection of the records was a major concern not only of the inquisitors but of the royal government. When townspeople in Languedoc who were discontented with the abusive exercise of power by the royal agents petitioned the king, the petitions were accompanied by inquiries. And the inquiries connected with heretical issues were based on the inquisitorial documents kept by the inquisitors. Thus the relationship of the city of Toulouse with the royal authority was negotiated and constructed on the basis of evidential documents.

Forts, Town Walls and a '*Steen logie*':
Changing Port Towns on the Coromandel Coast, 1606-1707

by

WADA Ikuko

Port towns on the Coromandel Coast generally had no strong defensive structures like fortresses or town walls before the establishment of the European traders and trading companies were formed. At the beginning of the seventeenth century, however, the Dutch East India Company (VOC) built a European style fort named Geldria at Pulicat, once the most prosperous port town on the Coast. The purpose of this study is to examine the changes observed at the Coromandel port towns for a century thereafter. Here, I mainly focus on the process of constructing forts, town walls and a factory built of stone at Pulicat, Madras and Masulipatnam, the three port towns where the English East India Company (EIC) and/or the VOC had their factories in the seventeenth and eighteenth centuries.

The first part of this study surveys the existing studies on the patterns and categories of the towns or urban centres in the pre-modern South India. Then it demonstrates the characteristics of the Coromandel port towns in

particular. Port towns on the Coast developed mainly due to the significant role of maritime trade. As there were no natural harbours with conditions suited to form a great port town, getting support from a political authority, for example, could help develop a coastal village into a new centre of maritime trade. Pulicat emerged as an important port connected with Vijayanagar rule in the fourteenth century, while Masulipatnam flourished as the Sultanate of Golkonda governed the coastal region more stably in the late sixteenth century.

In the second part I discuss how the VOC factories were built and situated at Pulicat and Masulipatnam. Fort Geldria, completed in 1613 with the approval of the local ruling elites, was built, actually not within, but next to the existing town. It is said that there were still wide open spaces left between the town and the fort in the mid-seventeenth century. By the end of the century, however, a wall was built surrounding the town and fort, which distinguished them from neighbouring region. In the case of Masulipatnam, the factory was not the property of the VOC but a lease from the local landowners. It was, therefore, a part of the existing town. Both of the factories were established without forcing any significant changes on the existing port towns, at least when the factories were first opened.

The third part deals with the English and Dutch attempts to construct defensive structures around their factories. Madras had been only a small fishing village when the EIC decided to open a factory there in 1639. In the course of seventy years, however, it was transformed into a flourishing port town. As for the process of development of Madras, it was characterized by an expansion of the town that accompanied its fortification. Fort St. George was completed in 1653, while a wall surrounding the town had been already being built in the years from 1644 to 1648. Whereas the inside of the outer fort, whose construction had begun in 1657, came to be called the White Town, the outside of the fort developed into the Black Town, around which a brick wall was completed in 1707. Meanwhile, the VOC had difficulties in building defences of their factories at Pulicat and Masulipatnam, both of which had already developed as major port towns before its arrival and had been governed by the local authorities. Fearing war and social unrest in the region, the Dutch at Pulicat could and did add some facilities, such as a new cellar for ammunition, to protect Fort Geldria. They also wanted to have a wall around the port town, but the construction work was only started years after it had first been proposed as a necessity because the local authorities did not approve it earlier. At Masulipatnam, the VOC had even fewer

options to obtain a more secure factory. Since the mid-seventeenth century, the Dutch had repeatedly asked the Sultanate of Golkonda to build a new factory of stone with high resistance to fire, but never succeeded until the beginning of the next century after the Sultanate was conquered by the Mughals. As to the town wall, it was in 1686 while they occupied Masulipatnam for a few months that the Dutch finally built it. In short, the EIC at Madras could fortify the factory and town from the beginning, while it took years before the VOC at Pulicat and Masulipatnam had a town wall and a factory built of stone.

In the early seventeenth century, the VOC had been able to participate in trading activities that were being carried out at the pre-existing port town and could profit thereby. In the mid century, however, there was growing unrest on the Coromandel Coast because of successive wars. Even such unstable circumstances, it was difficult for the Dutch to attempt to start construction of “defensive works” without the approval or agreement of the local authorities governing the town, with whom they had been negotiating in business for years. On the other hand, there were no such established relationships at Madras between the English and the local authorities. We can say that the fortified port town of Madras could be established because it was only a small and insignificant village in local politics.

Kamigata Cities under Shogunal Jurisdiction and *Fudai* Domains in Early-Modern Times

by

FUJIMOTO Hitofumi

This article focuses on the relationship between cities under direct shogunal (*bakufu*) jurisdiction and the hereditarily allied *fudai* domains in the Kamigata region in an attempt to clarify the character of the ruling structure of the Kamigata region and its historical development. In the 17th century the Kamigata region played the role of a key military point in the event of an emergency in the western provinces, and the *fudai* lords were assigned to important points to uphold the system. The cities under direct